

ある NGO ワーカーの見た Bangladesh の「災害」

——サイフルの「語り」から（その4）——

高 田 峰 夫

（受付 2014 年 10 月 31 日）

はじめに

I. 本研究の背景と意義

1. Bangladesh, 災害研究, オーラル・ヒストリー
2. 聞き取り：背景と状況

II. 語り手, サイフルについて

1. NGO に入るまでの彼の生き立ち—サイフルの語りによる—
2. NGO 業界に入る—同一—
3. Save the Children から2007年まで—同一—

III. 災害救援の体験（以下, サイフルの語りで）

1. 1987年の大洪水
2. 1988年の大洪水 (以上, 「その1」)
3. 1991年のサイクロン
4. ロヒンガ難民流入 (以上, 「その2」)
5. 1994年の竜巻
6. 1995年北西部洪水 (以上, 「その3」)

7. 1998年の大洪水

1998年に全国規模の大洪水が発生した。自分¹はこの時, シャリятプール²で活動をしてきたんだ。すでに1996年から Save the Children³の活動方針が（それ）以前の直接関与方式からパートナーシップ方式へと転換し始めており⁴, 各地で現地の小規模 NGO の独立が進んで

1 この文章はサイフルの語りを再構成した形で進めている。文中の「自分」「私」とはサイフルのことである。彼の経歴等については、本連載の「その1」参照。カッコ書きの部分は高田が補足ないし説明した部分。また、注は、Bangladesh の状況になじみがない人のために高田が加えた解説、または、話者サイフルの言説の背景説明、もしくは、彼の言説に疑問がある場合のコメントである。参考文献一覧は、連載の最終回に一括掲載する。

サイフルからの聞き取りは2005年から2007年にかけて多数回集中的に行い、その後も断続的に続けている。ここで提示した語りは、複数回の聞き取りから、ある程度まで整理したものである。

2 シャリятプール (Shariatpur) はダッカ県の南方, 低ポッダ川 (ジョムナ川本流とポッダ [Padma=ガンジス] 川本流の合流地点よりも下流) を挟み対岸の, マダリプール (Madaripur) 県内の郡。低ポッダ川に近い地域は洪水常襲地帯。Save the Children のプロジェクト実施地区の1つである。

3 当時サイフルが働いていた NGO の名前。イギリスに本部がある世界規模の NGO。サイフルはその Bangladesh 事務所採用され、主に地方のプロジェクト拠点に赴任して現場での調整に当たっていた。

4 直接関与 (direct involvement) 方式とは、外国の NGO 等（この場合では、Save the Children のパ

いた⁵。私は、これら小規模な現地 NGO（とダッカ事務所）との調整役として、現地に派遣されていたんだ。そこに大洪水が発生した。

とりあえず、ローカル・スタッフのうち、Director（バングラデシュ現地事務所長）、Assistant Director（同副所長）、Program Manager（プロジェクト部長）、Project in Charge（[特定のプロジェクトの] 担当責任者）の私、この 4 人が（ダッカの事務所に）集まり緊急会議を開催した。この 4 人の上には Country Representative（イギリスの本部から派遣される国代表 = Program Director）のイギリス人がトップに 1 人いるだけだった。彼は 4 人が議論して出した結論について、報告を受けてチェックし、それを承認するだけで、基本的には現地スタッフが具体的な路線を決定する。それだけの権限が現地スタッフには与えられていたんだ。ただし、以上のポジションの人々は単なる（バングラデシュで雇われた）現地職員ではなく、Save the Children では基本的に “International Stuff”（国際スタッフ = 外国での勤務もあり

バングラデシュ事務所) が、各種のプログラムやプロジェクトの実施に当たって、直接、調査計画から実施までに関与する方式。これに対し「パートナーシップ」は、明確な確立した定義はないが、一般的には、複数の NGO や国際組織（場合によっては、企業や政府組織）が、対等の立場で相互に役割を分担し、協働する方式、とされる。ただし、開発 NGO 等の業界で一般的になっている「パートナーシップ」方式は、もう少し限定的な意味合いが強い。すなわち、先進国側の NGO が資金を出し（= ドナーとなり）、それを原資に途上国側の NGO が現場で活動し、さらにそれを先進国側の NGO が監督・検証する、との分業形態を指して「パートナーシップ」と呼ぶことが一般的である。こうした実態に対しては、特に途上国側から、結局は単なる支配・被支配関係ではないか、変形したコロニアリズムにすぎない、等の批判的な見方もある。なお、英米法において「パートナーシップ」とは「共同経営」の訳語を当てる企業等の経営方式を指すが、これとは異なる意味であることに注意が必要である。

- 5 直接関与方式では、外国の NGO が各国の国事務所を開設し、国事務所が各種のプロジェクトを企画立案する。それを受けて、プロジェクトの実施場所を複数の候補地から選定し、当該地区で現地の住民を対象に個々のプロジェクト（例えば、組合方式等の農民の組織化、女性のエンパワメント、収入向上、識字教育、衛生教育、等）を行うことが一般的である。その場合、プロジェクトを実施するためには現地の住民を組織化するだけでなく、プロジェクト地に現地事務所を設立して職員を配置し、彼らを通じてプロジェクトが実施される形を取る。現地事務所の職員、少なくともその中の一部には、一定の高等教育を受け、事務能力及び地元有力者や官庁との交渉能力を有する人が不可欠であり、彼らが現地のいわば「現場監督」となってプロジェクトを動かした。この直接関与方式を取ると、プロジェクト・サイトやプログラムの数が増えれば増えるほど、外国 NGO（ないし現地の大規模 NGO）等が抱える人員が増え、人件費も膨らむ上に、それらの人員のマネジメントに費やす労力・人員も膨れ上がる。その結果、プロジェクトやプログラム本体に回す費用は相対的に低下する、等の問題も生じる。そこで、NGO の会員や支援者への「アカウントビリティ」を確保する等の名目で、現場の事務所をローカル NGO として独立させて現場のスタッフもそちらに移籍させ、相互に対等の立場からプロジェクトの共同実施に当たる「パートナーシップ」方式への転換がこの当時の開発 NGO 業界では流行になった。こうすれば、海外 NGO 等は、現地の事務所の業務を資金提供、企画立案、調査、監督、検証等に縮小集中することが可能になり、人員も大幅に削減することが可能になる。その結果、人件費も大幅に圧縮でき、マネジメントも容易になる。他方、新規に独立した現場のローカル NGO も、自主的な判断を行う余地が増える上に、より現場の実情に合った機動的な対応も可能になる。ただし、これはうまくいった場合の話である。通常は、単なるローカル NGO の下請け化、下手をすると、ローカル NGO へのプロジェクト丸投げと現場の切り捨て、等に終わる場合も珍しくない。ともあれ、直接関与方式からパートナーシップ方式への移行の結果、多数の小規模なローカル NGO が生まれることになったのである。

うる)の位置付けで、現に当時の上司の一部は現在、海外で働いている。シャプラニールは組織が小さいので、こうした点で限界があるように思う。

(4人の議論に)話を戻すと、とりあえずは、基本的に人々(=被害者たち)がどのような被害を受けていると認識しているのか、人々の視点を注意深く探ることで意見が一致した。その話し合いを基に、現地での救援活動が開始された。

私が救援活動を行ったのは、すでにそれ以前から担当地域であったシャリアトプールであった。救援活動は、通常使用している事務所ではなく、「台船」(浮埠頭、現地名 *ponton*)⁶を拠点にして、そこを臨時の事務所兼宿舎にした。台船の本来の所有者は政府だが、現地で「埠頭イザラダール」(*Ghat Izaradar*)または「埠頭主」(*Ghat Malik*)の名で呼ばれる人々がその(=使用料の)徴収を請け負っている⁷。私はそれ以前(=洪水前)から埠頭イザラダールと関係が良かった。そこで彼に、洪水の救援活動期間中だけ、その(=台船の)一部を事務所に借りたいと申し出た。すると、「こんな場所で良いのか?」と言いつつも、無料で貸してくれた。ここ(台船上)を臨時事務所にしたのには、理由がある。第1に、水が増減しても大丈夫なこと。まだ増水する可能性が高かったし、現に救援活動を始めた後に増水したよ。第2に、(様々な勢力から)中立を保つこと。(この決断には)誰もが驚いたが、良いアイデアだったと思う。また、これは意図したわけではないが、台船の内部は中空になっており、

- 6 現地では“Ponton”と呼ばれるが、正しくは“Pontoon”，英語では Floating Platform。フェリーやランチ(汽船)等が接舷するための、水上浮遊型埠頭。通常、巨大な鉄製の平たい箱型で、船のように中空構造になり、上の面には船から投げられるロープないしワイヤーを止める大きな杭が溶接されている。水に浮いている状態で定置されており、岸との間は鉄製の巨大な栈橋(しばしば跳ね橋型)で結ばれている。流されないように、栈橋の両側から岸に太いワイヤーロープで繋がれ固定される。バングラデシュでは、大規模河川の中流域まで潮の干満の影響を受けて水位の変化が激しく、一日の間でも水面の上下はしばしば1メートル以上になる。雨季と乾季の水位差はもっと大きく、数メートルにも及ぶ。また、岸は堆積土であるため、水位の変動は水際の水平移動をも意味する。そのため、毎日のように台船の位置を移動させてフェリーや汽船の接岸場所を確保する必要がある。日本の浮栈橋と形態上は似ているが、毎日のように移動させる点で、大きく異なる。
- 7 移動岸壁である台船は、巨大な鉄製構築物で、公共財であるため、政府が製造し、一般の使用に提供する。(管理主体については未確認)。しかし、実際に使えるようにするためには、毎日のように、時には一日に複数回、移動させて固定する必要があるため、維持には多数の人手を要する。そこで、政府は、その管理業務を入札で落札した特定業者の手に委ねる。業者は、通常、地元の有力者で土建業関連の「コントラクター」(*contoractor*)と呼ばれる業者であり、実際の移動・設置等は彼らが多数の手下を使って行う。彼らは利用者から使用する乗り物(船、自動車、等)の規模に応じて使用料を徴収する。こうして集めた料金から、一定額(=落札金額相当)を政府に台船の料金として納め、残りから人件費等を引いた分が業者の利益になる。バングラデシュでは、このような使用料・利用料徴収権のことを一般に「イザラ」(*izara, ijara*)と呼び、その権利を落札して実際の使用料・利用料を徴収する権利を保持する人々のことを「イザラダール」(*izaradar*)と呼ぶ。イザラは、直訳すれば「リース」であり、イザラダールは「リース権保持者」であるが、バングラデシュでの一般的な用法で言えば、むしろ「課税徴収権」とその保持者、の意味合いが強い。イザラは台船に限らず、様々な公共の場所(例えば市場、橋、等)に設定されており、毎年、入札が行われてその年のイザラダールが決められる。利権が絡むため、イザラの入札に応札するのはヤクザ的組織とも結びついた地元有力者の場合が多く、入札を巡って、しばしば暴力沙汰が発生する。

ランチ（貨客船）ための一時貨物置場になっている。そこを事務所の荷物置き場として利用できたので、結果的には安全上の観点からも台船を利用したことは良かったと思う。

活動は困難が多かったが、それは以前からの問題があったためだ。第 1 に、活動地域は大きく分けるとチョール⁸（堆積によって形成された中須）地区 2.5、本土側 0.5 程度の割合（＝ 5：1 ほどの比率）だったが、前任者たちが、当初はチョール地区中心に活動し、その後任は本土側に重点を置くというように、活動方針を変化させた。その結果、チョールの人々と本土側の人々の間で（利害をめぐり、洪水以前から）争いが生じていた。その争いが洪水の救援活動の中にも持ち込まれて、救援活動をめぐる対立になったんだ。具体的には、チョールで被害が大きく、本土側ではそれほどでもなかったのだが、本土側はチョール側と同等の援助を要求して、問題になった。また、前任者たちは、いずれも私に比べれば「シニア」⁹だったが、その人たちが現地でも活動していた時期は、もっとお金の使い方が緩やかだった。そのため、彼等は現地への就任時には現地の人々（専ら有力者たち）を集めて「ダワット」（食事の饗応）をして顔つなぎを図っていた。ところが、私の就任時には、Save the Children の側から予算が削られたため、私はダワットできなかったのだ。これを見て、人々は「（ダワットがないのは）サイフルのせいだ」と不満を持ち、私を非難した¹⁰。

さらに、先に述べたように、Save the Children は大きく活動の基本方針を転換し、パートナーシップ方式に移行している最中だった。ただ、パートナーシップに移行する際、（ローカル NGO として）独立を促される各地のプロジェクト実施現場では、独立後の安定的な運営を目指して、（経費圧縮の目的から）それまで抱えていたスタッフのうち、「多い人」（＝余剰人員）をそれぞれの NGO の判断で人員削減したんだ。誰を「多い人」とするか、何人を辞めさせるか等は、あくまで個々の地区（＝独立予定の個々の NGO）の判断だったのだが、辞めさせられた元のスタッフたちはそう考えなかった。それ（＝人員整理の判断）を、ダッカ（＝本部事務所）の言っていること聞く（＝意向を体現する）サイフルの指示によると見做し、（私が出してもいない、その）指示を撤回するよう私に迫っていた。そうした混乱期に洪水が襲ってきたため、さらに問題が大きくなったんだよ。

洪水は、満月との関係だったのか、ともかく 3 ヶ月も水が引かない異常な状態が連続し

8 詳しい説明は「その 1」の脚注参照。

9 バングラデシュの人が英単語の「シニア」を会話の中で使う場合、「地位が上の人」と「年上」の両方またはどちらか片方の意味で使う。この場合は、恐らく両方を意味。

10 バングラデシュでは様々な機会にダワットを行う。ダワットは食事への招待であるが、主に肉料理を中心とする「ごちそう」が出される。地方ではダッカのような都会に比べると全体的に貧しく、特にチョールやその近隣は貧困地区が多い。そのため、本来は単なる顔つなぎの意味のダワットだが、そこに招かれる顔ぶれに選ばれるということが、タダで「ごちそう」にありつける機会を得ることを意味し、それが一種の既得権と化す。予算削減のためにサイフルはダワットを行えなかったのだが、前任者たちの行ったダワットが慣行化しつつあったため、現地の有力者にとっては既得権侵害と受け止められ、彼の活動開始時点から現地では不評を買っていた、との事情の説明。

た¹¹。その中で、救援活動はいくつかの分野に渡って行われた。初めに行われたのは医療支援だった。これはシャリアトプールの3地区全てで実施され、対象は各（パートナー）NGOのメンバーに限定せず、（その地区の被災者）全員にした。各NGOが医療トレーニングを受けた現地のコミュニティ健康実務者（Community Health Practitioner）¹²を契約で雇い、彼らの手で診療や薬の配布が行われた。Save the Childrenがその費用を拠出したんだよ。これ以外の活動では、各NGOは（それぞれのNGOの登録）メンバーのみを対象に支援を集中した。

医療支援と平行して当初から行われたのが、野菜、（すなわち）ラル・シャーク（赤色のホウレンソウに似た野菜）、ラウ（ユウガオ＝食用ヒョウタン）、ボルボティ（長インゲン）等の種の配布だ。これは本土側で早く水が引くため、水が引いたらすぐに種蒔きできるよう、早急に対応したほうが良いと判断したからだ¹³。対象は（被災）全戸だった。通常、（自家採取した）種を保存しておくには、部屋の中でも高い場所に置く。ところが、今回の洪水では（氾濫した）水かさが高く、種を置いた場所まで水に漬かってしまったんだ。それを見て、人々はシーカ（ジュートで編んだ網袋に竹などで作った籠を入れて上から吊るす、一種の吊り籠）で天井から下げておけば良いことに気がついたが、実際にはそうになっていなかった。そのため、種の配布がなければ作付けできない状態だった。

そうそう、（以前）南西部でコチュリバナ [=巨大なホテイアオイ] で浮き島を作り、そこで農業をしているのを見た。同じことがチョールでできないかと思ったりもしたな。チョールの外側は流れが強く無理だが、チョールの内部には細かい水路が張り巡らされているの

11 バングラデシュでは土地が比較的平坦で、かつ洪水は大規模に発生するが、それに比して水の引くのは早い。例年の規模の洪水の場合には、せいぜい2・3日から1週間ほどで水は引く。それに比べると、この時の3か月というのは、明らかに例外中の例外であった。

12 通常、バングラデシュの村部には医療機関がない。あるのは、郡庁所在地や県の中心都市だけである。当然、それらの地域には医師はいない。代わって、伝統的には、コピラーズ（kabiraj）と呼ばれる村医者や産婆（dai）が医療行為を行ってきた。また、近年では、地方の市場町に薬局を開設する薬剤師が、（正式な薬学教育を受けたか否かを問わず）疾病に関する知識と、その疾病に対して必要とされる薬剤処方知識を持つ、と人々から「見なされ」（または、本人たちがそう「主張」し）、そのことにより、一般の人々から「ダクター」（医師）と呼ばれることも多い。しかし、そのような状態は問題だと認識されるようになり、地域の人の中からある程度の教育を受けた人が選ばれて一定の医療知識に関するトレーニング・コースを受講し、その後、“Community Health Practitioner”（一種の保健師的な位置づけ）として簡単な検診や薬剤投与のような医療行為を行うようになってきた。

ちなみに、辞書によれば、コピラーズはアユルヴェーダの知識に基づいた医療行為を行う人、とされるが、バングラデシュの村部では、全くの民間療法的なものであっても、何らかの医療知識を持つとされた人はコピラーズと呼ばれることが普通である。

13 洪水の水が引いた直後は、まだ土中に水分が多く、なおかつ洪水の水と共に栄養分が運ばれてきているため、植物の発芽・生育に非常に適しており、無灌水、無施肥でも良い収穫が得られる。早く収穫が得られれば、被災者も野菜等の自給状態に戻れるため、災害復旧の視点からも、野菜の種子配布は非常に重要な意味を持つ。

で、そこでなら十分可能だと思う¹⁴。

家屋修復の支援も行ったよ。これは資金援助で、各 NGO のメンバーと地域の貧困者（非組合員）が対象だった。建物を修復する費用として、各2,000タカを合計1,600~1,700世帯くらいに配布したんだ。この資金自体は Save the Children が提供した。対象者リストを各 NGO が作成し、それに沿って支援が行われたんだが、残念ながらリストは必ずしも公正なものではなかった。そこで、私の判断で（配布対象者リストを）修正しつつ実施した¹⁵。具体的には、リストに対象者として名前が載っていてもクレジット¹⁶のお金を借りていて、なおかつ他の地域に逃げて返済しない人（＝債務不履行者）には資金援助しないと、逆に、リストに名前は載っていなかったが、明らかにもっと貧しい人がいた場合、そちらに資金を回す、等の例があったね。この支援活動は、直接には現場のクレジット担当スタッフたちを通じて行われたのだが、そのスタッフたちは SSC¹⁷に受かってすぐの若い女性ばかりだったので、なかなかうまく進まなかった¹⁸。また、この資金援助を受けられなかった人々は、各 NGO でなく、私に文句を言いきた。

ところで、（お金の）配布を受けた人々は、2,000タカのうち700~800タカを家屋修復に使い、残りは何とそれ以前からのクレジットの（繰り上げ）返済に充てていたんだ。彼らの意図は、当座は何とかギリギリでしのぎ、無理しても返済しておいて、洪水の水が引いた後で稲の作付けに資金が必要になる時、優先的に新規クレジット資金を回してもらおうとするものだった。具体的には1,200タカ返済しておいて、後に3,000タカ融資してもらおう、というような意図で、事実、返済する際には「後で（＝作付け資金が必要になる頃）私に先に（優先

14 ちなみに、この農法についての研究報告書を偶然、ダッカ市内で入手した。そこにはバングラデシュ南西部だけでなく、世界的に有名なビルマのインレー湖の事例も掲載されており、参考になる [HAQ, ASHADUZZAMAN & GHOSAL 2002]。

15 リストに名前が載れば家屋修復のための資金が得られる。他方、各 NGO のメンバーかつ被災者全員では多数になるため、その中から被害の大きい人を選び出さねばならない。また、非組合員の貧困者は多数いる。その中から、貧困の程度がひどく、なおかつ被災の大きい人を選び出すことも必要である。誰もがリストに名前を加えるように求めるが希望者が多いため、各 NGO の担当者は、自分に近い人や、より有力である人をリストに加える操作を行いがちである。そうして歪められたリストであることが判明したため、サイフルが再度調べ直して、対象者を再選定したのである。

16 Save the Children が提供するマイクロ・クレジットのこと。

17 SSC は Secondary School Certificate、高校 [=10年生] 修了資格認定試験のこと。

18 バングラデシュでは政府が教育の普及に取り組んでいる。特に、社会的に弱い立場にいる女性のエンパワメントを目的に、UNICEF 等と連携して女子が中等教育を受けることを支援している。その結果、最近では男子以上に多くの女子がハイスクールを終了し、SSC に受かるようになった。しかし、地方ではそれらの卒業生の働き口がない。恐らく、それらの女性に活躍の場を提供するため、あえてこの活動に SSC に受かったばかりの若い女性（大体10代後半から20歳前後まで）を雇ったのであろう。しかし、村部は元々が保守的で、イスラームの規範意識も都市に比べると強く、女性のこうした社会での活動には批判的である。その上、彼女たちは、それまで学生であったために全く社会経験がない。それらの女性たちに活動の現場を任せるのであるから、活動が円滑に進まないのは当然であろう。ここでは、明らかに理念が先行して現実と乖離している様子がうかがえる。

的に)金を貸してくれ」と言いつつ返済するのが常だった。他方、(現地の)パートナー NGO の職員もこれを歓迎して受け入れた。なぜなら、そうして返済が進めば担当職員の実績として評価される上、戻ってきた現金の中から洪水と NGO 独立後の混乱で滞っている給与が払われると考えたからだ¹⁹。

クレジット関係では注意すべき点が多く見出された。クレジットは、そもそも通常時のみを考えて設定されたものであるため、洪水などの災害を考慮に入れていない。そのため、いくつもの問題が生じたのだ。第1に、洪水被災によりクレジット返済が滞る。第2に、洪水被災により、クレジットの繰り上げ返済が多数発生した。これは先に触れた資金援助とは全く異なる理由によるものだ。すなわち、例えば、洪水が来るとアヒルが逃げてしまい、大きな損失が予想される。そのため、本格的な洪水被害を受ける前に早めに売ってしまうと考えた村人が多かった。その売却で得た資金を繰り上げ返済に充てた人がいたんだ。同様に、鶏やヤギの場合も、洪水被害で死ぬ(溺死、病死)確率が高いので、被害を予防するため、やはり早めに売ろうと人が多かった。これらの人も繰り上げ返済を行った。そうそう、ジャマルプール(Jamalpur, 北部の県)で見た事例だが、ヤギは水に弱いのにに対し、羊は洪水が来ても大丈夫だった。また、ヤギと異なり羊は年3回子供を産む²⁰。だから、ヤギに代わって羊の飼育を広められたら良いと思う。ただ、羊の肉はヤギ肉以上に臭みがあるので、食習慣が変わらないと難しいかもしれないけどね。第3に、一般のクレジットは平常時のみを考えているため、洪水等の災害被災時の出費には対応できない問題も浮上した。これに対しては、後に別のクレジットが考案・実施されたよ。

さて、チョールを中心に村人の間では通常時、ミルク売りや家の建築等の場合に労働交換の慣習がある。それと同様のことを洪水時にできないか、とも考えた。具体的には、洪水時にアヒルやニワトリを売ろうとしても、急いでいるのを見越して安く買い叩かれるばかりだ。そこで、アヒルやニワトリを売りたい人が何人かで代表を出し、(その人にアヒルやニワトリを預け)ダッカまでまとめて売りに出てもらおう。当然、ダッカではずっと高値で売れる。ム

19 だとすると、そもそも資金提供された2000タカという金額設定が大きすぎたのではないのか、との疑問が生じる。また、そもそもこの資金提供は、洪水災害で被災した人々が家屋再建のために使用する必要経費を提供する、という人道的見地からのものであった。ところが、被災者たちは、その資金を一部しか本来の目的のために使用せず、過半を借金返済に充ててしまっている。これは明らかに目的外使用であり、本来の趣旨から言えば認められるものではない(はずだ)。しかし、彼のここでの語り方からは、たとえその資金の出所がどのようなものであれ、供与したクレジットが返済さえされれば良い、返済金回収率を上げさえすれば良い、という一般の金融機関の貸し出しに見られるのと全く同じ論理が垣間見られる。これは、世上しばしば流布されがちな、「美談」としてのマイクロ・クレジットをめぐる言説とは大きく異なるものであるが、その意味で、これはマイクロ・クレジットの実態の一端を示す貴重な証言でもある。さらに、最後の部分は、回収されたマイクロ・クレジットの資金が、部分的にはその NGO の運営資金に(一時、常時?)流用されている可能性が示唆されているようにも聞こえる。

20 ヤギの妊娠は、通常年1回から2年で3回程度まで。

ラに戻ったら、売り上げの中からその人の交通費と日当を引き、残りを全員で分配するようにすれば良いのではないかとね²¹。

そうだ、エピソードを1つ（話そう）。洪水時に出産を迎えた女性がいた。住宅の屋上に避難生活をしており、周辺にはダイ（バングラデシュの伝統的な産婆）もおらず、近くのダイの下に行こうにも手元には小船がなかった。ただし、彼女には出産に関する若干の知識があった。その一部は伝統的な村での言い伝えだが、さらに洪水前のクレジット集会（＝マイクロ・クレジットを借りている人が返済する機会として定期的に開かれる小集会）にダイが出席し、その話を聞いたんだ。そこで彼女は、出産の手伝いなどできないと嫌がる夫に指示して手伝え、自分で出産することにした。まず、出産を子供に見せるのは禁止なので、子供との間にサリーをカーテン代わりに吊るして見えないようにした。次いで、夫に指示をしながら子供を引き出してもらった。夫が力を入れて引っ張った弾みで、新生児は洪水の水の中に放り出されたが、すぐに拾い上げて何とか無事だった。ただし、あくまでもこれはうまくいった例だけだね。

洪水では多くの子供が溺れて死んだ。2ヶ月の間にチョールの2地区で合わせて6人が死亡したが、通常は一年間を通じてもこれほど多く溺死することはない。そのため、子供が溺死しないよう常に子供に注意しているように、と意識化するためのアナウンスをモスクのマイクを通じて行った。

少し状況が落ち着き、徐々に水が引き始めてから、貧しい人々の生活再建も考え、“Cash for Work”を実施した²²。土盛りの仕事を中心だったね。その際、あえてNGO側から（対象者の）選別は行わず、自主的に参加希望者に参加させる形を取った。そうすると、少しでも生活がマシな人々、具体的には下の上、もしくは中の下くらいの層の人々は、「恥だから妻をそんな仕事には出さない」と考えて、自然に村の貧困層だけがスクリーニングされることになる（はずだった）。ただ、一部だが、表向きはもう少し上の層に属す女性も参加していた。普段は何とか取り繕っているものの、（それらの人々の内実は）苦しいのだった。ただ、それらの中層の女性や、やや高齢の女性は、普段したことがないので、とても力仕事はでき

21 たしかに興味深いアイデアだが、しかし、この方法を実施した場合、アヒルやニワトリには個体差があり、当然、売値も異なるから、各個体ごとの売値を詳細に記録しておかない限り（しかも、それは相対取引の行商形式ではほぼ不可能だから）、売上金をどのように分配するかで揉める可能性が高いのではないかと。

22 “Cash for work”は労務提供と引き換えの現金供与による支援。基本的には、この場合のような洪水被害の場合、何らかの災害復旧作業を実施し、その作業に被災者を雇うことで、一方で復旧を進めると共に、他方では被災者に現金収入機会を提供することで彼らの生活再建を助け、同時に、被災者が援助への依存体質に陥ることを防ぐ、という複数の目的から実施される災害支援策。農村等での環境改善と貧困層への支援策を同時達成する支援方法として、通常時にもしばしば採用される手法でもある。なお、以下の語りの内容を読むと、この時の対象は女性限定であったようだ。

ない。でも、仕事をしないではお金を出せない。ところで、土盛りの仕事は、土を鍬で掘り返したり、土を籠に入れて頭上で運んだりする力仕事だが、それだけに体力を消耗する。そこで、40人に1人くらいは飲み水を汲んできて、その水を彼女たち（＝力仕事をしている女性たち）にコップに入れて渡す役が必要になる。これなら普段、肉体労働をしたことがない女性や高齢者にでも可能なので、それらの人をそうした役に配置して負担軽減を図るように（自分が）取り計らったんだ。仕事は主に土盛りだが、チョール全体をカバーするのは物理的に不可能だ。そこで、場所の選定に関しては、チョールの線状集落²³の中で端の一角に集中した。とりあえず一角を盛り上げることで、いずれは徐々にその高さに合わせ、集落全体の盛り上げを自分たちで行ってくれることを期待したからだよ。ただし、これだけでは洪水の際に避難する場所としては限界がある。そこで、これとは別に一部の土地を選び、その土地を次回以降の洪水の際には地域住民のシェルターに提供することを約束する形で、その土地の地主²⁴とパートナー NGO とが協定を結んだ。その上で、それらの土地にも土盛りを行った。結局、“Cash for Work” は約1ヶ月間、のべ2,000人ほど（を対象に）実施された²⁵。また、日当には当時の日雇い男性の日当と同額を出した。そうすることで、男女平等を間接的に示し、人々の意識を変えたいと望んだからだよ²⁶。ただし、この点に関しては、（その結果を）モニタリングする前に（自分が）Save the Children を辞めてしまったので、実際のところ現地でどれほどの影響があったのか、実際に何らかの変化が生じたのかどうかについては不明なんだけどね。

（さらに）緊急資金貸し出しは“Relief in Development” の名目で²⁷、合計150～200万タカを

23 チョールは、河川の堆積作用により発生する中須のため、流れに並行して細長く線上に形成される。そのためチョールでは、中央ないし比高のある土地に流れと並行して道路が作られることが多く、さらに、道路の両側に沿って線上に集落が形成される傾向にある。

24 チョールは自然発生土地であり、本来は無主土地である。また、バングラデシュの法制では、チョールは基本的に全てが国有地（khas jomi）とされる。何らかの機会に（多くは土地なしの貧困者に対する救済策として）一定条件を満たす人に有償・無償で払い下げられることはあるが、それまでは基本的に所有権は発生せず、したがって法的には所有者＝地主はいないはずである。しかし、実際には、無主土地にしばしば生じるように、最初にその土地を占拠した人がその土地の使用権を主張する。さらに、土地が安定するようになると、その土地を長期に占拠していた人が実効支配者となる傾向にある。ここで「地主」と彼が呼んでいるのは、その種の実効支配者のことである。なお、このような特殊な事情の土地であるために、土地の占有をめぐる争いも多く、しばしば地元の有力者がラティヤール（ラティ [= 棍棒] を持つ人、一種の暴力集団）を使って無理やり居住者たちを排除し、占有権を確保する例や、さらには、複数のラティヤール集団が占有権をめぐる衝突し、多数の死傷者が発生する例も、まみ見受けられる。

25 彼の語りでは、延べ数なのか、それとも2,000人が1ヶ月か、必ずしも明確ではないが、予算に限界があることを考えると、恐らくは「延べ2,000人」であろう。

26 こうした金額設定の判断は、彼の語りを聞く限り、恐らくは上部の承認を得てであろうが、基本的には現場責任者のサイフルに任されていたようだ。

27 実態は緊急資金貸し出し（Emergency Credit）だが、Save the Children 側の位置づけでは“Relief in Development” の名目で実施された事情を語っている。

無利子で提供した。その際、Save the Children 側は通常のマイクロ・クレジットとは別のガイドラインを設定し、資金管理するように細かく項目策定した上で、パートナー NGO はそれに沿って資金供与した。(金額は) 1 件当たり2000~3000タカだった。借りた人々はその金で農業、(主に) 野菜栽培等に投資し、利益が上がると、そこからパートナー NGO に返済する。パートナー NGO 側はそれを通常のクレジットとは別会計で保管し、全体の返済状況を 2・3 年後にレビューした上で、その後に通常のクレジットの原資に組み入れする形をとった。

Save the Children の仕事は面白かったんだけど、ほとんどがダッカから離れた土地で家族とは別々の生活 (= 単身赴任) だった。しかも、転勤で各地を転々と移動して行く。さすがにその生活が辛くなり、Save the Children を辞めることにした。1999年 4・5 月の頃だったな。すぐに以前一時勤めたことがあるクリグラム²⁸の小さな NGO, “Solidarity” に再度加わり、6 ヶ月に渡り、(第 1 に) パートナーシップの理解と実施に当てるためのデザインを詰めるための仕事、(第 2 に) 地域住民参加型プロジェクト (Community Participatory Project) の形成、(第 3 に) 小 NGO の利点と欠点を学ぶこと、等をした。(第 1 の) パートナーシップの仕事が後で本 (= NGO のパートナーシップについてサイフルが記した小冊子) の原型になったんだ。それから、いくつかの NGO に応募し、最終的にシャプラニールに就職を決めた。ほぼ同じ時期に別の NGO でもう少し良い条件 (賃金等) の仕事が決まりかけていたんだけど、当時の駐在員 (日本人の現地事務所長) だった T 氏の話しが面白く、こちらでの仕事の方がやりがいがありそうだったと思ったので、あえてシャプラニールに決めたんだよ。

8. 2004 年の洪水

(2004年頃には) シャプラニールでもパートナーシップ形式への移行が行われていた。その中 (= 移行途中) で洪水が発生したので、今回の救援活動はシャプラニールにとってはパートナーシップ形式での初めての試みとなり、全てを最初から作らねばならなかった。自分は主に「パプリ」²⁹を担当し、代表の B 氏と話し合いながらの活動になった。(洪水発生) 第一報は B 氏が電話してきたんだ。今回はメグナ川方面から洪水だとの知らせだった³⁰。そこ

28 Kurigram はバングラデシュ北西部の県。

29 PAPLI は、ダッカの北東に位置するノルシンディ (Narsindi) のローカル NGO で、シャプラニールのプロジェクト実施地区現地事務所の 1 つが独立したものの。独立後はシャプラニールのパートナー NGO の位置づけにあった。

30 ノルシンディの東部は、バングラデシュ第 3 の河川であるメグナ川に面する。また、メグナ側が蛇行して残した旧メグナ川や流域の小河川が入り組み、低地帯やチャールが続く。こうした地形上の特徴から洪水被害を受けやすい地域である。

で、B氏に、①水の状態を地図化すること、②洪水発生を人々に知らせること、の2点を提案した。そうするうちに、わずか1・2日で洪水の水が一気に襲いかかり、そうした努力も何もならなかった。仕方ないので、とりあえずB氏にお金を使わずにできることを何点か提案した。具体的には、(第1に)ハイスクールにシェルターとしての場所を確保すること³¹。(第2に)人々に対し清潔にすることや下痢等に注意することの呼びかけ、意識化をすること³²。(第3に、B氏が)シャプラニールにいたら何をしたらか考えてみるように³³、(等々を)言ったんだ。これを受けてB氏は洪水の水に浸からないトイレ設置を発想した。さらに、熱のひどい子供や下痢の子供に経口補水剤 (oral saline)³⁴を配布することにした。この時点ではシャプラニールの(この洪水被害に対する)方針が未定だったので、これらは全てパプリの手持ち資金から実行に移されたんだ。

この頃、ダッカのシャプラニール事務所では、当時の駐在員であるS氏と私が(シャプラニールが取るべき行動について)話し合いをしていた。今回はJICA³⁵が救援活動に乗り出す様子だったので、それ(=JICAが実施する救援活動)を具体的に分担すると、どのようになるか、等々の検討したんだよ。そうする間にも現地での状況はさらに悪化していったので、パプリはこれまでの活動に加えて、被害のひどい人々に食糧配布を行った。これはシャプラニールから資金提供を受けて実施したんだ。

結局、JICAからシャプラニールが医療支援プログラムの資金を受けることになった。そこで、それをシャプラニールの元々のプロジェクト3地区で独立したNGO、ノルシンディのパプリ、マニクゴンジ(Manikganj)のステップ(STEP)、イショルゴンジ(Ishwarganj)のコリ(COLI)で個別に実施し³⁶、JICAの緊急支援チームとシャプラニールが連携してその実施

31 公立中高(5年制)であるハイスクールは、通常、地方村部地域では稀な鉄筋コンクリート造りの建物である(正しくは大まかな骨組みだけ鉄筋コンクリートで、壁等はレンガを積んでコンクリートで上を塗り固めた建築)。そのため、洪水にも流されず、なおかつ、ほとんどが2階建て以上であるため、洪水の水が増水しても、2階部分以上は水没から免れる。被災者の避難所として、非常に適した条件を備えている。

32 洪水の際には、水が地面に溢れだして全てを飲み込む。そのため、洪水の水は、特に人家付近では人や動物の排泄物、生活廃棄物、病原菌等を含む汚染水となる。したがって、その水に触れることは下痢疾患を始めとする各種の病気を引きやすい。特に被災者が集中して生活する避難所では、病気の流行を招く危険性が高い。そこで予防の見地から、このような指示をする必要があった。

33 B氏は、パプリが独立して代表となるまでは、シャプラニールの職員であった。その当時、様々な救援活動を行った経験があるので、それを思い出し、シャプラニールの職員だったら具体的にどんな行動をとるか考え、それにしたがって動き出すように、とサイフルはアドバイスしたのである。

34 塩分と糖分を含んだ粉末。下痢疾患による脱水症状を防止するため、飲料水に溶かしてスポーツドリンクのようにして使う。

35 Japan International Cooperation Agency, 2003年10月より独立行政法人国際協力機構、かつての国際協力事業団。

36 これらのNGOとシャプラニールの関係、特に現状については、シャプラニールのHPの「支援活動を見る」の中に「パートナー団体一覧」として簡単にまとめられているので、参照されたい。
<http://www.shaplaneer.org/support/partner.html>

状況をモニターする形で行うことに決定した。ノルシンディ地域の場合で言えば、現地での対応をパプリだけで担うのは無理があったので、私が B 氏に他の地元 NGO とフォーラム³⁷を組んで事態に対処するように提言し、それが受け入れられた。さっそくフォーラムが組まれたので、自分もノルシンディに行ってフォーラムのミーティングに出席し、一体どのような支援が可能か、また必要かを、出席者と話し合った。その結果、形式としては次のような形で実施することになった。

シャプラニール－(パートナー関係)－パプリ－(パートナー関係)－5つの現地 NGO

また、各 NGO の分担地域、政府と参加 NGO との関係調整、業務分担等についても席上で話し合った。

具体的な救援活動として、まずは、以前の洪水時の経験から、どのような種類の薬品が必要かを考え、それを提供した。活動に際しての政府との関係は良好だったね。薬の注文はダッカでシャプラニール側がまとめて薬品会社に対して入札を行い、購入した。その上で、注文した薬を指定した量だけ、指定した日時に指定した場所まで運んでもらうようにした。不正がないように、届いた薬品は JICA の担当者（日本人職員）の目の前で一つ一つチェックしたんだ。

医療支援の実際は、洪水被災地域を医療チームが巡回する形で行った。チームは 1 組が 4 名以上で、①最低 1 名の救急医療者（Paramedic）、②(被災者の)登録担当者、③薬品供与担当者、④人々の整理担当者から編成された。このうち、救急医療者は現地で外部から雇ったが、あとは全てパプリと 5 つの NGO の職員が当たったんだ。全 10 チームで、そのうちパプリが 5 チーム、現地の 5 つの NGO が各 1 チーム（を構成した）。これらのチームの全員、(すなわち)各 NGO からそれぞれ 4 名ほど、合計 20 名程度と、パプリの全職員約 35 名、彼らには事前にミーティングでオリエンテーションし、細部の確認を行った。

医療チーム派遣以前に、洪水発生後間もない頃、パプリの職員を被災地全村へ派遣し、(パプリと 5 つのパートナー NGO)傘下 17 の村で実態調査を実施した。この調査を基に被災者リストを作成し、それに従って救援活動を開始した。NGO のフィールドワーカーに、「今日ここに医療チームが来るから何時までに集まるように」と事前に広報させておく。医薬品はダッカからパプリへの割り当て分が配送されると、パプリの事務所の 1 室を医薬品倉庫にして、そこに保管した。保管に当たっては、洪水の水に漬からないようにまず部屋の中に木製ベンチを並べ、その上に薬品(の箱)を積み重ねた。部屋には担当者 1 名を常に配置し、薬の出入りをチェックさせた。その部屋まで各 NGO の代表が薬品を取りに来るんだ。どの NGO でど

37 この場合は、臨時の災害救援実行委員会のような組織。

の程度の量の薬品が必要かは、リストにより事前にはほぼ予測して準備しておいたので、それを渡す（という形だった）。

救援活動の細部に関しては（自分が）B氏と相談しながら方向性を決め、ガイドラインを作成した。ただし実際は、私がパプリで必要だと思うことを念頭に置きつつ大枠を決めたんだけどね。そのガイドラインをB氏が現地に持ち帰り、現地の（5つの）パートナー NGO へ伝えて行く。救援活動に際しては、毎週パプリを含め6つの NGO の代表が集まりミーティングを開催し、救援活動の進行状況と問題点等について議論した。自分は（全体の）調整役（coordinator）として初回に一度だけ出席し、こうしたミーティングの意味と重要性について話した。それ以後は、自分はB氏と専ら話しをし、現地ではB氏と各 NGO の代表が話し合いを行った。今回の活動がいずれはノルシンディでの NGO 活動のスタンダードになることを目指したんだよ。医療支援活動が一応の終了になった後には、ワークショップを開催し、自分たちの弱点、強い点、将来の活動等について6つの NGO で話し合いを行った。その席には私も参加した。ちなみに、このフォーラムは今（2005年時点）でも続いていて、ミーティングも継続的に行われていると聞いているよ。

医療支援と並行して、当初から井戸の洗浄を進めた。これは自分が過去の経験から強く提案して実現したものだ³⁸。また、家畜や家禽へのワクチン投与も実施した³⁹。貧しい人たちにとっては家畜や家禽が重要な資産であることから、その資産を守ることが目的だった。これについては自分は何も言わず、B氏が他の NGO の代表者たちを説得して実施に至った。ワクチンは政府の“Livestock”（畜産 [省]）⁴⁰の下に中央ワクチン生産センター（Central Vaccination Production Center）があり、そこにシャプラニールの名前で要請してワクチンを入手した。パプリみたいな地方の小さな NGO が要請してもなかなか応えてはもらえないが、シャプラニールは一応外国 NGO であり、その要請であれば、すぐさま対応してもらえるからだよ。資金はシャプラニールが提供した。入手したワクチンはすぐにパプリへ運び、（同時に STEP 等へも）、そこからさらにパートナーになった現地 NGO の5団体にも配布し、その上で各地域で実施した。モスクのマイクを使い「明日、ワクチンの投与を行うので集まってください」と知らせる⁴¹。実

38 注32で記したように、洪水の水は汚染されている。井戸（手押しポンプ型）がその汚染水に浸かると、パイプの内部に汚染水が入り込んで井戸水を汚染し、下痢疾患等の経口感染を招く。そのため感染予防には、井戸のパイプ内部を洗浄し、汚染水を徹底的に汲み出して、井戸水を飲用可能なレベルにまで浄化することが必要なのである。

39 洪水の水が汚染されているためと、洪水がジメジメとした不衛生な環境を生み出すことから、洪水発生時には家畜や家禽にも伝染病が発生したり、下痢疾患に感染したりして、死んでしまう例が多い。そのため、予防にはワクチン接種が必要である。

40 正しくは、Ministry of Fisheries and Livestock（漁業畜産省）。

41 住民は、ほぼ全てムスリムなので、各集落ごとにモスクがあり、モスクには礼拝の時間を知らせるためのラウド・スピーカーが設置されている。そのスピーカを使用して、この広報を行ったのである。

施は、各ウボジラ（＝郡、この場合は郡庁所在地）に技術者がいるので、彼らにお金を払って来てもらい、投与してもらった⁴²。彼等は公務員であるため、公式にはこの方法は良くないのかもしれないが、お金を出さないと来てもらえないから、やむを得ないんだ⁴³。ワクチン投与の結果、効果があり、ほとんど死ぬ家畜は見られなかったほどの大成功だった。また、パートナーシップによる医療支援も成功し、（これは）JICA として初めての試みだったが、（JICA 側からも）高く評価された。この間、緊急時だったので、誰も休みを取らずぶっ続けに活動を継続したよ。

ワクチン投与とはほぼ同時に野菜の種を配布した。種はダッカから運び、その準備はシャプラニールが行った。実施の詳細はパートナーシップに基づく他の活動と同じ方法だった。これは後に良い収穫をもたらし、感謝されたね。

活動を行う傍らモニタリングを継続していると、洪水後 1～2 ヶ月して、一部の世帯が資金面と食糧調達の面で非常に苦しい状況にあるのが判明した⁴⁴。シャプラニール内部でも、これにどう対応するか大きな議論になったが、結局“Cash for Work”（のスキーム）で道路修復事業を行うことになった。事業期間は約 1 ヶ月間だった。ただし、（この時）自分はこの案に反対したんだ。理由は、特に苦しい世帯は大体が母子家庭や老人世帯であり、それらの世帯は（道路修復事業の）Cash for Work では救われないからだ。そこで、何とかそれらの人々を組み入れるために、道路修復だけでなく植樹や道路修復の仕上げ作業等の軽労働をプログラムに加えることになり、それによって一応の目的は達成された。

これだけひどい被災状況だったが、人々はマイクロ・クレジットをほぼ平常通り返済し続けていた。かなり無理をして返す人も多かったね。これは、やはり（洪水後の作付けに当てる）次ぎのローンが優先的に自分に回ってくることを期待したためだろう。政府関係当局からは「洪水被害で苦しい時だから返済する必要はない」との広報もあったのだが、人々の側がそれを拒否したんだ。理由は、「政府からはお金が回ってこない」「1 ヶ月後に（作付けのための）お金が要るから、そのためにも今は返しておく」等々だった。

今回の洪水被害救援の経験から、洪水関連疾病についてのブレットがあれば、それを地

42 家畜・家禽ワクチンは、基本的には注射による投与であり、一般には獣医が行う。郡の事務所で通常の業務として行う場合には最低限の費用しか取らない。

43 技術者とは、獣医ないしそれに準じる人。公務員である彼らは、出張でのワクチン投与に関しても正式な要請と所属先の認可があれば、本来は無償で出張業務を行うべきである。したがって、この種の資金提供（単なる旅費・食事提供を超えた謝礼の授受）は明らかに違法である。しかし、公務員（特に現業職員）は給与水準が低く、労働意欲が低いいため、最低限の業務しかやりたがらない。その彼らに、本来の業務外ともいえる出張業務を求める以上、やはり何らかの謝金提供はやむをえない。そうしないと、彼らは何らかの理由を口実に決して来てくれないので、この種の事業を行うことは不可能、との現実がある。この辺りは、途上国一般に通じる難しい問題である。

44 モニタリングは、ある事業を行う際、活動の進捗状況、影響、問題点等を現場で確認することだが、ここでは同時に活動以外の被災現場の状況確認を広く行っていたようだ。

域の救急医療者に渡しておいて、今後の被災時の初期治療に役立てることができるであろうし、そうすれば大きなメリットがあると考えた。そこで何人かの医師にブクレット執筆を働きかけたが、誰もが「忙しい」と言って拒否した。そのため、(このブクレット案は) 結局実現しなかったんだ。

気がついたことだが、1998年の大洪水の時から、被災地域外の一般の人々が自分個人の可能な範囲で救援や援助を行うようになり、今回2004年の洪水の際には、それが大規模かつ広範に広がって多くの活動が見られた。非常に良いことだと思うね。

今後に関しては「コミュニティに基礎を置いた洪水(対応)プログラム」(Community Based Flood Program)が必要だと思うんだ⁴⁵。自分個人の考えだが、サイクロン・シェルターを新設するのは止めるべきだよ。これはすでに Save the Children にいた時から考えていたことなんだ。(新規に)シェルターを作るには多大な費用がかかる上に、それがいつ、どのように役立つか不明だ。むしろ、地域に元々あるハイスクール等の校舎を修理・改築して、それをサイクロンや洪水時のシェルターに利用する方が実状に合っているし、費用も少なく済む。それと、「地震」対策が不可欠だと思う。この国では地震対策に関する知識がないし、自分にもその知識はないが、日本に行って地震対策が必要だと実感した⁴⁶。この国にも地震が起きる可能性が高いと専門家も予測しているから、地震に関する何らかのトレーニングや知識を得る必要があると思うんだよ。

(続く)

-
- 45 分かりやすく言えば、堤防等のハードな方法によって洪水を防止しようとするのではなく、ある程度まで洪水は避けたいということを前提に、実際に災害が発生した場合には地域コミュニティのソフトな対応で可能な限り対処しよう、とする方向性。これは、洪水に限らず、自然災害全般に対する考え方の転換を意味する。すなわち、災害を未然に防止しよう、または物理的な対応で何とかしようとするのではなく、自然災害はある程度まで避けたいことを前提として、それが発生しそうな場合、ないし、発生した場合に、人々はいかに行動すれば、その被害を避けられるか、被害を最小のものに留められるか、それを考えるべきだ、とする方向性への転換である。事実、サイフルは、これに続いてサイクロンの例を引き、サイクロン・シェルター(サイクロン発生の際に逃げ込む大規模なコンクリート造りの建物)の建設ではなく、人々の行動を変えるべきことを主張しているし、その後では地震の例にも言及している。
- 46 この部分のインタビューの前年(2004年)に彼と同僚のP氏が日本に行きシャブラニール本部で研修すると共に、各地を回り、日本の様子を視察しつつ、バングラデシュにおけるシャブラニールの現場のことを話す活動を行った。サイフルは、この時、主に西日本を回り、P氏は東日本を回ったが、ちょうどそこで新潟中越地震が発生し、P氏と同行の日本人スタッフは偶然にも地震被災者になる、という稀な経験をした。サイフルも彼らから話を聞き、また日本で日本の人々が実際に地震災害に対してどのような対応をするか、目の当たりにした。この経験から彼は、バングラデシュでも地震災害への備えと、実際に地震が発生することを前提とする対応(避難訓練や被害への対応)を考えるべきだ、と考えるようになったのである。事実、あまり知られていないが、バングラデシュを含むインド亜大陸東部では、過去にはほぼ100年に1度程度の周期で大規模な地震が発生し、大きな被害をもたらしている。しかし、直近の大規模な地震は19世紀末であるため、すでに人々の記憶にはなく、今のバングラデシュでは地震に対して無防備である。

Summary

Disasters in Bangladesh observed by an NGO worker:
Narrative of Saiful (Part 4)

TAKADA Mineo

Introduction

- I. Background of the study
 1. Bangladesh, Disaster study, Oral History
 2. Interview: Its background and situation
- II. On narrator, Saiful
 1. Short life history of Saiful till his joining NGO—by his own narration—
 2. Joining NGO—by his own narration—
 3. From Save the Children to 2007—by his own narration—
- III. Experience of disaster relief activity (All by his own narration)
 1. 1987 Flood
 2. 1988 Flood (Up to this section, Part 1)
 3. 1991年 Cyclone
 4. Influx of Rohingya refugees (Up to this section, Part 2)
 5. 1994 Tornado
 6. 1995 Flood in the North-east region (Up to this section, Part 3)

7. 1998 flood

In 1998, a disastrous flood hit about the half of Bangladesh and the flood water stagnated there for about three months long. It was very rare case even in Bangladesh. At that time, I (Saiful) worked for Save the Children, Bangladesh as a project in charge position and stayed at Shariatpur, Madaripur. The area was severely affected by the flood and we conducted an emergency relief work for the victims in *Chor* (sand bank of a river) area as well as in the mainland side. The difficulty of the relationship with the local people, detail of the relief works, and the matter (and problems) related to the micro-credit program scheme are narrated.

Just after this relief work, I decided to leave the organization and served for a local NGO in northern part of the country for about half a year, and then joined to Shaplaneer, a Japanese NGO.

8. 2004 flood

This year's flood was coming from the north eastern direction by the mighty Meghna, the third largest river in Bangladesh, and the affected region was a low lying area of the river basin by the Meghna. I was worked for Shaplaneer. And, just at that time, we have been changing the governing system of Shaplaneer; from the direct management system to the partnership scheme between Shaplaneer and local NGOs. Following this change, the relationship between Shaplaneer and the project areas were also changed. The local offices of Shaplaneer were cut off from Shaplaneer itself and were persuaded to be the independent NGOs. Therefore, the relief work for the flood hit areas were a trial case of the coordination between Shaplaneer and local NGOs. In this sense, this was a model case for disaster relief work from then on.

The relief work against this flood disaster was conducted by the cooperation with JICA (Japan International Cooperation Association, a half-independent government aid organization of Japan). This was a first experience for Shaplaneer and a trial model case of working together, with JICA and NGO (Shaplaneer, in this case). I played a role of coordinator between Shaplaneer and PAPLI, a former Shaplaneer field office in Narsindi and a newborn local NGO there. PAPLI, with coordination with other five small NGOs in the region, conducted the relief work in the affected area and Shaplaneer and JICA support it, i.e. supply fund for relief work, medicine, vaccine for the livestocks and poultries, etc.

(To be continued)